

編隊という組織

令和4年の元旦に、BS番組で帝国海軍の戦闘機、紫電改の編隊長として単独撃墜70機、共同撃墜40機あまりという戦果を上げ撃墜賞や司令官賞をもらった杉田庄一という海軍少尉の生涯を知りました。昭和18年4月18日に山本五十六連合艦隊司令長官が前線視察のため陸上攻撃機でラバウル基地を発進しますが、待ち受けていた16機の米軍機によって長官機は撃墜されます。それを零式戦闘機で護衛した1人が当時兵曹であった杉田でした。兵曹は護衛の失敗を大いに悔やんだそうです。昭和20年4月に、出動命令で編隊長として飛び立とうとしたとき、兵曹は上空から来襲した敵機によって滑走路の端に墜落し、たったの25歳で戦死し、後に二階級特進で少尉として称えられます。

杉田編隊長の空中戦法では、編隊空戦を鉄則とし、部下には絶対に編隊から離れないことを教えたようです。単独での攻撃を強く諫めるのです。訓練では編隊を離れてしまう未熟者にも黙って指導しますが、戦闘において編隊を離れた者には本気で叱ったという兵曹です。空中戦からの帰投後も必ず部下とブリーフィングをし、次の戦闘への備えに余念がなかったといわれます。



紫電改の編隊

これと全く同じような話題として、アフリカなどで動物が獲物を捕獲するとき、集団で襲い、追い立てて一頭を群れから離れさせて捕まえるという戦術があります。群れから離れると餌食となるのです。彼らは本能的にこうした戦法を知っているようです。

このように戦闘機がばらばらになって戦うのではなく、絶えず編隊で空中戦をするのだという編隊空戦の原則は、爆撃機が自らを護るために編隊を崩さないことにもあてはまるというのです。こうした編隊を整えることの大切さから、私は組織とか理事会のあり方を考えさせられました。理事として4年間で数度

塗炭の苦しみの経験したことがあります。組織の規律からはずれ、理事会がさながらばらの編隊のような状態になったことも経験しました。虫唾が走るような発言から仲間から見限られ、あげくは途中で任務を放棄する者も出る事態になりました。こうした軽挙妄動のごたごたで八碁連から離脱した者もいます。

インターネットの時代に、必要なスキルを学ぼうとしない理事もいました。こちらが教授しようとしてもついてこないのです。これには本当にてこずりました。杉田編隊長ではありませんが、本気で叱りたくなったものです。新しいことに挑戦しない姿勢、自分を変えようとする態度では組織で任務を果たすことができません。これからの理事会の運営では、このような編隊重視という組織論はもしかして参考になるかもしれません。

(八碁連会長 成田 滋 令和4年1月)